慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	Edward Friedmann, Der mittelalterliche Welthandel. von Florenz in seine geographiscken Ausdehnung. mit 2 Tafeln.
Sub Title	
Author	阿部, 秀助
Publisher	慶應義塾理財学会
Publication year	1920
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.14, No.10 (1920. 10) ,p.1498(160)- 1499(161)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	新刊紹介
Genre	Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19201001-0160

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

は何を要求して居るかと云ふ問題に就て、解釋を下して居る。本書の大部分は平凡の記述であつて單に米國勞働組合の狀況を紹介したに止まるが、第五編に至つては、讀者に多大の感興を與へなければ已まないであらう。日本の讀者に紹介したい個所もあるが、現行法令に抵觸する恐れもあるので、之を敢てしない、研究者が原書に就て、一讀されることを希望する。

（堀江歸一）

Edward Friedmann, Der Mittelalterliche Welthandel von Florenz in Seine geographischen Ausdehnung. mit 2 Tafeln.

著者は主として Pegolotti の Pratica della mercantura を根本的史料として、中世に於けるフロレンス商業の地理的範圍を考察せしものにして、彼れは先づ結論に於てフロレンスの大銀行家バルヂの代理者として千三百十五年より千三百三十六年の間にアントワープ、英國、サイプルス、小亞細亞の諸地に旅行せし Pegolotti の紀行と、十五世紀に於ける Giovanni di Antonio da Uzzano の旅行記とを比較して、十四、十五兩世紀の間にフロレンス其者の商業的發達上相違の存せることを明かにせり、即ち同市の販路は政治上の關係よりして漸次年代を經過すると共に亞細亞方面にて縮少せらるゝと共に自餘の方面に於て擴張せられし傾向を現せり、次ぎに著者はフロレンスの對外的商業が果して何れの地點迄及びしやを考證して麻洛哥、支那、蘇格蘭、亞弗利加の內地方面等を指摘せり、斯くの如きは中世の企業が單なる Kundenproduktion の範圍を脫して近世的なる傾向を有せしことを明かにする有力なる證左となす、要するに本著は地理的意義を重要視せしに不拘、歷史的方面より見るも中世紀末に於けるフロレンスの企業を考察するものにとりて最も有力なる材料を提供するものにして、若、著者が更にフロレンス商業の地理的分布狀態と共に更に當時に於ける之が商業の組織又たは經營狀態に就きて併せ記述せられなば、經濟學者殊に經濟史家にとりて更に大なる滿足を求むることを得可し。（阿部秀助）

米田庄太郎著　「經濟心理の研究」

四六版六二六頁、定價金參圓八十錢　京都弘文堂發行

わが社會學界の寂寞を破る者は米田博士をおいて他に求めることは出來ない、本書は博士がすでに公にせる經濟心理に關する研究の諸論文の內一般的問題に關するものを蒐集したものである。即ち第一章「タールドの經濟心理學」第二章「經濟發達階段心理化の研究」第三章「原始經濟生活と交換有無問題」の三論文よりなる。更に附錄として「タールドとベルグソン」なる一文を附して居る。

以上の諸論文を通觀するも博士の研究は一に社會心理的基礎に立脚せるものである。例へば博士がタールドの說を批評せる言に「經濟學の出發點も到着點も人間であると云ふことは、茲に改めて述ぶる必要もないほど、今日の經濟學者の一般に承認して居る思想である。併し此思想の眞義は只之を箇人心理學的に考察する以上は未だ充分に理解し得られないものである。而してタールド先生の如く、之を社會心理學的に考察するに於て、始めて其の眞義が充分に又豐富に理解されるのである。」（本書一一六頁）とあるが如く、博士自身も亦かなり忠實なるタールドの學徒である。勿論本書に於いて博士自身の所論と見るべきものは極めて少ない。僅かに第二章第六節と第三章第三節の兩節のみであ